



令和7年度小佐野記念財団
高校生国際交流事業（台湾）
事業実施報告

令和7年度小佐野記念財団高校生国際交流事業 概要

- 1 目的 県内高校生を台湾・高雄市に派遣し、高雄市の高校生との交流を通じて、国際交流の促進や相互理解の増進、次世代を担う県内高校生をグローバルな人材に育成する
- 2 日時 令和8年1月22日（木）～25日（日）
- 3 訪問先 台湾
- 4 訪問団 県内高校生10名及び引率2名
- 5 内容 (1) 台北市内視察
(2) 中山高級工商職業学校訪問
(3) ホームステイ
(4) 高雄市内視察

(1) 台北市内視察

日時：令和8年1月22日（木）16時00分～18時00分

場所：中正記念堂、龍山寺

内容：台北松山空港到着後、市内視察。最初に訪れた中正記念堂では、台湾の歴史や蒋介石について学ぶとともに敷地内を散策。台北最古の寺院、龍山寺では、日本の寺院や参拝方法との共通点、相違点について学んだ。

(2) 中山高級工商職業学校訪問

日時：令和8年1月23日（金）10時30分～16時00分

場所：中山高級工商職業学校（高雄市）

内容：日本の私立高校にあたる中山高級工商職業学校を訪問し、交流。

・ 歓迎会

大勢の学生から盛大な歓迎を受けて入場。学校長および学生代表から歓迎の挨拶をいただいたほか、少数民族生徒による伝統舞踊披露、学校紹介動画の放映があった。本県からも訪問団長及び学生代表から挨拶。

・ キャンパスツアー

生徒の案内による校内見学を実施。1万人以上の生徒を擁する当校の敷地は広大で、日本の高校とのスケールの違いに圧倒された。また、案内をしてくれた生徒達が自分の高校の歴史や施設を詳しく英語で紹介する様子を見て、本県生徒は感銘を受けた。

・ クラス別交流

外国語専攻の4クラスに分かれ、当校生徒と昼食。その後、本県生徒は各クラスで県の魅力を伝えるプレゼンテーションを実

施。また、各クラスにおいて企画されたレクリエーションに参加。明るくオープンな雰囲気の中で、生徒達は英語を交えながら、親睦を深めた。

(3) ホームステイ

日 時：令和8年1月23日（金）～24（土）16時00分

場 所：各ホームステイ先

内 容：中山工商生徒の家庭にホームステイ。本県生徒は初めてのホームステイとなる生徒も多く、緊張した面持ちでステイ先に向かったが、夕食や市内観光などに連れて行っていただき、打ち解けた様子。1泊2日の短期間ではあったが、ステイファミリーとの交流は日本と異なる生活習慣や文化を学ぶ機会となった。

(4) 高雄市内視察

日 時：令和8年1月24日（土）19時00分～20時00分

場 所：美麗島駅、六合夜市散策

内 容：壮大なステンドグラスが有名な美麗島駅を視察した後、高雄市最大級の観光夜市・六合夜市を散策。台湾の夜市文化を目の当たりにするとともに、タピオカミルクティーや臭豆腐、タージーパイなどの各自台湾グルメを楽しんだ。

中正紀念堂にて



龍山寺にて



中山工商・歓迎会にて



中山工商・キャンパスツアーにて



中山工商・クラス別交流にて



高雄市・美麗島駅にて



この交流事業に参加するにあたり、私は「台湾の文化を学ぶ」「コミュニケーション能力を向上させる」という二つの目標を決めた。参加中は、この目標に向けて積極的に行動し、様々なことを経験することができた。

まず、文化については日本と同じようで違うというのが4日間を通して得た印象だ。台湾は日本の植民地だったという過去もあり、一部には日本の文化が感じられるような場面も多くあったが、ほとんど私が触れたことのないものだった。例えば食文化では、八角や五香粉などの馴染みのない食材が使われていた。はじめは違和感を覚えたものの、毎回のように口にするうちにそれらの食材のおいしさに気づくことができた。町の様子として日本と大きな違いを感じたのは、台湾の夜市だ。日本にあるもので例えるのならお祭りの屋台だろう。食事はもちろん、輪投げや射的などの娯楽的なものも多くあり、こども、学生からお年寄りまで幅広い年代の人が利用していた。夜市の賑やかな雰囲気はとても楽しく、日本にもあったらよいのにと感じた。

二つ目のコミュニケーションに関して多くの経験を得ることができたのは、ホストファミリーとの交流だ。相手が知っている日本語は「ありがとう」のみで、全くと言っていいほど日本語が通じないなかでのコミュニケーションだった。そのため、双方ともに決して高いとは言えないレベルの英語で意思の疎通を図ることとなった。全力で脳内での英作文をしてもうまく言葉にできないときが多くあった。できるだけ翻訳機に頼りたくなかったため、そんなとき私は身振り手振りを交えてコミュニケーションをした。痛感したのはコミュニケーションに語学力が必要なのは当然だが、それ以前に「伝えたい」「わかりたい」と思うことがとても大切なのだということだ。このような心がけを通して、ホームステイを迎え入れてくれた同級生の男の子や、高校交流で出会った高校生など多くの新しい友達を作ることができた。国籍は違っても、感性の似ていることが多くあり、すぐに打ち解けることができた。彼らとは今も SNS を通じて交流が続いている。

交流事業中は、何をするにも初めての体験であり、心が動かされ続けた4日間だった。日本から出るということはここまで視野が広がるものなのかと帰国後の今、強く感じている。このような私の成長もこの小佐野記念財団様の高校生交流企画という機会があったからこそだ。小佐野記念財団様、そして旅に同行して下さった新海様、依田様には心の底から感謝したい。また、一緒に台湾を旅した10人のメンバー。4日間でかけがえのない仲間になった。一緒に思い出を作ってくれて、ありがとう。この事業に関わってくれたすべての皆様、本当にありがとうございました。

私はこの留学を通して、身につけたいと決めていたゴールがある。

それは、物事を柔軟に考える力を身につけることだ。私は、柔軟さは自分の世界を広げる力を持っていると思う。柔軟に物事を受け止めることができれば、自分の考えに固執せず、相手の考えを尊重することができるからだ。

到着後、台湾の有名な観光地を訪れた。ガイドさんが歴史や建物が建てられた背景について一つ一つ丁寧に説明してくれた。内容は難しく、すべてを理解することはできなかったが、台湾の歴史の深さを感じることができた。その後、レストランで北京料理を食べた。異国の料理はとても新鮮で楽しかった。さらに、市場にも行き、たくさんのお店が並ぶ様子に驚いた。ダージーパイやタピオカミルクティー、小籠包を買ってホテルで食べた。特にタピオカミルクティーは日本と味が違い、とてもおいしかった。

一番印象に残っているのは、台湾の高校を訪れたことだ。台湾の学生はとてもフレンドリーで明るかった。クラスでレクリエーションをしたり、山梨のフルーツ産業について紹介したりした。みんなが真剣に聞いてくれてうれしかった。また、台湾について紹介してもらい、台湾の魅力を知ることができた。その後、クイズやいす取りゲームを通して交流を深めることができた。罰ゲームもありとても盛り上がり、言葉が完璧に通じなくても笑え合えることが嬉しかった。インスタグラムを交換したり、一緒に写真を撮ったりすることで短い時間でも距離が縮まったように感じた。また、たくさん質問をしてくれて自分たちに興味を持っていてくれることを実感した。交流する上で相手を知ろうとする姿勢が大切だと学んだ。

ホームステイでは、初めは言葉が通じるか不安で緊張した。しかし、私が行きたい場所に連れて行ってくれたり、台湾の食べ物をたくさん食べさせてくれたりして、とても温かく迎えてくれた。夜市では2つ目のダージーパイ、小籠包やさつまいもボール、臭豆腐を食べた。臭豆腐はにおいが強く、食べるのに勇気が必要だったが挑戦することができた。ホストファミリーとの生活の中でゆっくり話してくれたおかげで会話を続けることができた。細かいニュアンスが分からないときは、ジェスチャーを使ったり翻訳機で確認しながらやりとりをした。

今回の旅のゴールは、物事を柔軟に考える力を身につけることだった。台湾での生活を通して、日本では異なる文化や習慣に触れ自分の当たり前がすべてではないことに気づいた。現地で実際に体験することで、さまざまな考え方や価値観があることを実感し、視野が広がった。この経験を通して、自分の考えにとらわれず、相手を尊重しながら物事を考える柔軟さを身につけることができた。

令和8年1月22日～25日に行われた高校生国際交流事業では自分の価値観を変えるような経験ができた。特に印象に残ったことは2つある。

1つ目は中山工商高校と交流したことだ。私たちが訪問してすぐ、歓迎会を執り行ってくれた。日本語であいさつをしてくれたり、台湾特有のダンスを披露してくれたりと盛大に歓迎してくれた。その後各グループに分かれて、各々教室で山梨の魅力を紹介したりレクリエーションを行ったりした。発表するときや会話をするときとはとても緊張していたが、それをほどこしてくれるこのように明るく接してくれて嬉しかった。また、レクリエーションでは、椅子取りゲームやジェスチャーゲームなどを企画してくれて、言語の壁を感じず、心から楽しむことができた。帰り際でも、たくさんのお菓子をくれたり笑顔でお見送りしたりしてくれた。自分たちのような訪問者を手厚くもてなしてくれて、とても嬉しかった。このような寛容な気持ちを見習おうと思った。

2つ目は、ホームステイをしたことだ。私自身、海外に行くことやホームステイをすることは初めてだった。不安はあったが、ホテル生活では感じられない現地の人たちの生活の様子にははとも興味があったから、とても良い経験になった。ホストファミリーからはいろんなことを学んだ。まず住まいに関しては、日本とは違って、玄関には防犯対策として「鉄門(ティエメン)」と呼ばれる頑丈な金属性の外扉がついていたり、たたきが無いので入ってすぐスリッパに履き替えたりする。また、お風呂場に浴槽はなくシャワーのみ、トイレではトイレトーパーを流してはいけないという規則があった。次に食事に関しては、ほとんど外食で済ませているようだ。また、取り分ける用の箸と食べる用の箸が分けられていた。これらのように、ホストファミリーと過ごした時間はとても新鮮で、常に驚きと発見があった。いろんなところに連れて行ってくれたり、いろんなことを教えてくれたりしたホストファミリーには感謝でいっぱいだった。以上の2つが、私の価値観を大きく変える経験になった。

他にも、中正記念堂の建物の迫力さ、龍山寺の華やかさ、美麗島駅内部の壮大なステンドグラスの美しさに圧倒された。また、夜市での食べ歩きでは、日本ではめったに見られないような食べ物屋さんが並んでいて、常に新しいものを目の当たりにして楽しかった。

この4日間は、本当に貴重な経験となった。外国へ行く経験がなかった私は、行く前からいろんなことへの不安があった。しかし、いざ台湾で過ごしていると、不安や緊張を大きく上回る、楽しさや面白さ、驚きがたくさんあった。台湾で友達ができただけでもすごく嬉しかった。そしてなにより、私と一緒にこの事業に参加した9人のみんなとの仲が一気に縮まったことも嬉しかった。この事業に

応募して本当に良かった。高校生でこのような経験ができたことに感謝の気持ちを持って、必ず将来に活かしていきたい。

私は県の国際交流事業の一環として、3泊4日の日程で台湾を訪問した。本事業への参加目的は、「自分の固定概念を捨て、多角的な視野を持つこと」であった。私は将来、社会福祉士として国内外問わず、人を支える仕事に就きたいと考えている。そのために、多様な価値観や文化背景を理解する力が不可欠であると考え、本事業に参加を希望した。

滞在中は現地の高校を訪問し、校内見学や生徒同士の交流活動を行ったほか、ホームステイも経験した。現地の生徒と英語・中国語や身振り手振りを交えながら交流し、言語や文化が異なっても理解し合おうとする姿勢の大切さをさらに実感した。また、ホームステイを通して台湾の家庭での生活を体験し、学校外での科ア置換や家族の在り方にも触れることができた。

特に印象に残ったのは、日本と台湾の学校の雰囲気の違いである。台湾の高校では、髪を染めている生徒や、ネイルやメイクをしている生徒の姿が見られた。日本の学校生活に慣れていた私は、当初それを「規則が緩い」と捉えてしまった。しかし、それは私自身の固定概念であったと後に気づかされた。

ホームステイ先のお父さんがその高校の先生であったため、私は校則について質問した。先生は、「数十年前までは日本の学校のように厳しい規則がありました。しかし、私たちは規則を緩め、時代に合わせて変えました。今はパーソナルが重要視される社会です。社会に反することは許されませんが、学校が過度に縛るべきではないと考えました。子どもたちの個性を尊重したいのです。」と話してくださいました。この言葉聞いたとき、私は今までどこか引っかかっていた“規則が厳しいことが正しい”という一つの価値観を打ち砕いた。

交流活動の中で、台湾の高校生は自己表現にためらいがなく、周囲もそれを自然に受け入れているように感じた。カラオケ大会のような催しが行われた際、私は人前で歌うことをためらっていた。しかし現地の生徒が「あなたも歌いなよ」と声をかけてくれた。その一言に背中を押され、私はみんなの輪に加わることができた。教室の中心で楽しそうに歌う生徒たちの姿を見て、個性が尊重される環境があるからこそ、自信や積極性が育まれるのではないかと感じた。

もう一つ印象深かったことがある。滞在中、ホームステイ先の家族と市街地観光をした際に、台湾の社会の一面に直面する出来事があった。夜市や人通りの多い場所で、松葉杖を横に置き、道に伏せてうめき声をあげる人や、鈴を鳴らして注目を集めながら、通行人に対してお金を集める人々を見かけた。また、車いすに乗った人とそれを押す人が、物品を受け取った後に高額な金額を要求する場面も目にした。日本でも似た状況はありますが、台湾ではこうした社会的弱者の存在を非常に強く感じた。

私は台湾の福祉制度や支援の現状については詳しくはないですが、この経験を通して、表面的なイメージの裏には見えにくい課題が存在することを実感した。異文化を理解する上では、ポジティブな面だけでなく、社会的弱者の存在や制度の課題にも目を向けることが必要であると学んだ。

今回の研修を通して、私は「当たり前」は国や文化によって異なるということを実感した。物事を一方向から見るのではなく、その背景や理由を考えることで理解は深まる。固定概念を捨て、多角的な視野を持つという当初の目的は、この経験によって大きく前進したと感じている。

今回の事業は私の将来の選択を大きく広げてくれたと考える。私と同じように、将来的には海外と日本、または山梨県とをつなぐ仕事に挑戦したいと考えている今後の高校生にはぜひこの国際交流事業に参加してもらいたい。

多様性が尊重される現代において、多様な価値観に触れてお互いのことを知ることが大切であると考えるとともに、将来建築士になって様々な人と関わりながら仕事をするという夢を持つ私にとって、多民族社会である台湾での国際交流を通して視野を広げる経験が今の私には必要だと思い、この派遣事業に応募した。

中山高級工商職業高校を訪問した時、私は衝撃を受けた。そこには様々な国の出身の学生がいて、台湾語、英語、中国語が飛び交っており、性別、民族関係なくみんなが楽しそうに学校生活を送っていた。全員が日本人のクラスで生活している私にとって初めてのことであった。中国語に加えて日本語と英語を話せる学生2人に案内され、1年生のあるクラスを訪問した。私が訪問したクラスは英語をまだ話すことができない人がほとんどのクラスだったため、うまく会話ができず、初めは私の近くに来てくれなかった。そこで私は簡単な英語やスマホの翻訳機を使って趣味や好きなことをたくさん聞いた。すると、たくさんの生徒が日本のゲームやアニメ、好きな音楽などについて教えてくれた。そこからどんどん会話が広がっていき、初めは私が一方的に話しかけていたのが、今度はスマホの翻訳機を使って私に話しかけてくれるようになった。その時、相手とつながることができたと感じた。相手との相違点を発見することは私と台湾の学生に刺激を与え、相手に興味を持つことで未知からくる先入観を壊し、相互理解につながられた。

ホームステイ先で英語を話せる姉妹2人のいる4人家族に迎えられた。英語を十分に話すことができない私を温かく迎えてくれて、台湾の文化や生活、食べ物、観光地をたくさん教えてくれた。ホテルに泊まるだけではわからなかった台湾の生活がたくさん体験できた。また、共通言語の英語を学ぶ必要性を感じた。ホストファミリーと話す中で、表現の難しい言葉を翻訳機でいちいち訳す面倒くささと、翻訳を待っている時間の会話のしずらさを感じた。しかし、翻訳機を使わない会話だとどうしても内容の浅い会話が増えてしまう。中山高級工商工業高校でも日本語と中国語と英語が話せる学生が、通訳として日本人の私と台湾の学生をつなげてくれたのを見て、私が英語を話せるようになれば、さらに活発な会話をする事ができると感じた。ホームステイ中に、ホストファミリーにずっと気になっていた、台湾人と中国人の関係について聞いた。私は勝手に、台湾と中国は領土問題を抱えており、対立しているため中国人と台湾人は仲が悪いと思っていた。しかし、ホストファミリーは、私たちは多民族社会の中でお互いを尊重しているから、意見の違いで仲が悪くなることはない。学校にも中国人の友達がいる。と話してくれた。私はその時、自分が偏見を抱いていたことに気付いた。

今回の派遣事業で、国際交流だけでなく、たくさんの日本との相違点を発見することができた。例えば、台湾はゴミ箱が多い。調べてみたら、食べ歩き文化が多いこと、ごみの分別意識が高いこと、日本ほどゴミを持ち帰る文化がないことが理由だった。市街散策の時にこのような発見がたくさんあり、一つの物事にいろいろな背景があって面白かった。また、一緒に行った10人の高校生と中を深めることができた。海外に強い関心を持つ高校生と交流することで刺激を受けたし、初めての海外での不安も和らいだ。この10人で台湾に行くことができて本当に良かったと思う。

この4日間でたくさんの人とつながり、たくさんのも、文化、価値観に触れ、視野を広げることができた。そして、国際交流への興味をより一層高めることができた。これからも積極的に海外との交流を行っていきたい。最後に、この4日間素晴らしい時間を共にしたすべての人に感謝したい。

以下に、私が台湾で経験したことを詳述する。

1日目

空港を出た瞬間、「あの空気」が私を包み込んだ。湿気、排気ガス、制汗剤の匂いが混ざり合ったような、日本の片田舎で育った私が一生慣れることはない、外国特有のあの空気。いよいよ海外に来たという実感が少しずつ湧いてくる。

空港を出たバスの車窓には、見慣れない繁体字、亜熱帯の植生、レトロな街並みが映っていた。その情緒ある景色に見惚れているうちに、私たちはいつの間にか最初の目的地である中正記念堂に到着した。中正記念堂の中央には、中国国民党の指導者である蒋介石の銅像が安置された非常に荘厳な建物がそびえ立っている。共産党から台湾を守り、中華民国を存続させた正の側面と、戒厳令下の独裁体制を敷き、多くの台湾人を処刑した負の側面の両方を併せ持つ蒋介石の姿は、私にとって言葉では表せないほど複雑な感情を抱かせるものであった。

次の行き先は龍山寺である。寺といっても仏教のみを信仰しているわけではなく、道教や民間信仰など、さまざまな宗教が融合した寺院であった。境内には観音菩薩や文昌帝君など多くの神々が祀られており、一つ一つの参拝を重ねるうちに、台湾独特の宗教観について少しずつ理解できるようになった気がした。

2日目

朝早くからホテルをチェックアウトし、私たちは台湾第二の港湾都市である高雄へ向かった。私たちが利用した台湾高速鉄道(THSR)は日本の新幹線技術の初めての輸出案件であり、列車の内装が日本の新幹線と遜色なかったことは今でも鮮明に覚えている。高雄市中心部に位置する左営駅から、訪問先である中山高級工商職業学校へと向かった。

この学校訪問で最も記憶に残っているのは、クラスで行われた歓迎会である。日本から来た私たちを、クラスメートは温かい雰囲気迎え入れ、ダンスや歌を披露してくれた。そこで、私たちからもお返しとして歌を披露したいと考え、私は自分の十八番であるEminemのLose Yourselfを歌うことにした。

歌い終わると、教室は拍手に包まれ、何人かの男子生徒が声をかけてくれた。早口の中国語で何を言っているのかは分からなかったが、自分を褒めてくれているのだということだけは伝わってきた。その瞬間、言語を介さずとも心と心で通じ合うことができる音楽の素晴らしさを改めて実感し、この経験は忘れられない思い出となった。

3日目

この日は、ホームステイ先のホストブラザーとともに、高雄市の中心部を観光した。ホストブラザーの日本名はサヤトという。彼に日本名があるのは、日本の

アニメや漫画が大好きで、日本語を話し、日本文化に強い関心を持っているからだ。

サヤトの日本語は非常に流暢で、ホストファミリーと会話をする際には、いつも通訳をしてくれた。台湾では英語を話す人が比較的少なく、日本語と英語しか話すことができない私にとって、台湾語・中国語・日本語・英語を操るマルチリンガルのサヤトの存在はとても心強く、同時にかっこよかった。

駅までホストマザーに送ってもらった私たちは、世界で最も美しい駅の一つといわれる美麗島駅を訪れた。駅の改札内には、巨大なステンドグラスアートである「光之穹頂」が広がっており、その色彩豊かな光景は非常に印象的で、今でも目に焼き付いている。また、芸術特区では、日本統治時代に貿易のために使われていた倉庫を高雄市が改修し、ストリートアートや彫刻など、さまざまなアートワークを楽しむことができた。

サヤトと過ごした三日目を通して、高雄市が「街全体が美術館」と称される理由を、実際に肌で感じる事ができたように思う。

4日目

ついに迎えた最終日。私たちは高雄市を後にし、首都・台北へと戻ってきた。台湾での最後の食事として、私たちは鍋料理を楽しむことになった。台湾の鍋料理は日本のものとは少し異なり、一人一つずつ鍋が用意され、しゃぶしゃぶのようにして食べるスタイルであった。日本とは違う食文化を味わいながら、旅の終わりを実感した。

その後、私たちは台北の市街地を徒歩で散策した。中でも印象に残っているのは、市街地の一角にあった郵便局である。この郵便局は日本統治時代から残されており、現在もなお現役で利用されているという。玄関には日本で見慣れた日本郵政の赤色のポストが設置されていた。また、近くには三井の家紋を掲げた倉庫跡の建物もあった。この建物は市の歴史建築に指定されており、現在はカフェとして再利用されているらしい。

台湾での最終日には、台北の街に残る日本統治時代の面影に触れることができ、日本と台湾が歴史的に深く結びついてきたことを改めて実感した一日となった。

最後に

私は今回の国際交流事業を通して、台湾の人々と交流することにより、歴史や文化を学ぶだけでなく、自分自身が成長する貴重な機会を得ることができたと感じている。というのも、日本では当たり前だと思っていた価値観や常識が、海外では必ずしも通用しないということを改めて実感したからである。

朝の幹線道路を三人乗りで走る原付や、トイレットペーパーを流すことのできないトイレなどは、日本に閉じこもっていたら決して目にすることのなかったのだろう。これらの経験を通して、自分の視野が広がり、物事を多角的に考える大切さを学んだ。

このような貴重な機会を提供して下さった小佐野記念財団、県庁職員の方々、中山高級工商職業学校の皆様、ホストファミリー、ガイドのシュウさん、私の家族、先生、そして共に研修に参加したメンバーの方々に、この場を借りて心より感謝申し上げます、本感想文の結びとしたい。

私は、今回の交流事業を通して、多くのことを学び、得ることができました。台湾に行く前は、台湾と日本は同じアジアに位置しているため、似ている点が多いのではないかと考えていました。しかし、実際に現地を訪れてみると、多くの違いがあることを知りました。

特に印象に残ったのが夜市です。日本では、お祭りなどの特別な機会にしか屋台の料理を食べることができませんが、台湾では毎日のように夜市が開かれており、街全体がお祭りのように賑わっていました。屋台で売られている食べ物も、日本と共通するものがある一方で、台湾ならではのものも多く見られました。私が最も衝撃を受けたのは、台湾の伝統料理である臭豆腐です。臭豆腐は名前の通り非常に強い匂いがあり、通りかかる際には鼻をふさぎたくなるほどでした。また、見た目もあまり良いとは言えず、正直なところ食欲はあまり湧きませんでした。しかし、現地のホームステイ先の方に話を聞くと、臭豆腐は台湾ではとても人気があり、おいしい料理であると教えてもらい、とても驚きました。また、屋台で購入した食べ物の中で最もおいしかったものは、台湾で有名なフルーツであるパイナップルのジュースと、パッションフルーツのタピオカジュースです。どちらもとても甘く、それでいてほどよい酸味があり、とてもおいしかったです。帰国後、日本でもパッションフルーツのタピオカジュースが飲めるか調べてみたところ、販売されていることが分かりました。そのため、日本に帰ってきた次の日に実際に買いに行きました。台湾での思い出を振り返りながら飲むことができ、とてもおいしく感じました。

食べ物だけでなく、生活習慣や文化の面でも多くの違いを見つけました。例えば、エスカレーターの並び方です。日本では左側に寄って並ぶのが一般的ですが、台湾では右側に寄って並んでいました。また、日本の一戸建て住宅は二階建てや三階建てが多いのに対し、台湾では土地の横幅が狭いため、四階建てや五階建ての建物が多いことにも驚きました。さらに、初日に訪れた寺院では、入口と出口が決められており、入口は「龍の口」、出口は「虎の口」となっていました。出口から出る際には、悪いものを虎に食べてもらうという意味があると知りとても面白いと感じました。参拝の方法も日本とは異なっており、文化の違いを強く感じました。また、蒋介石の像も見学しました。建物の天井にはヒノキが使われ、細部まで丁寧に造られていてとても美しかったです。さらに、階段の段数が蒋介石が生きた年数と同じであると教えていただき、みんなで数えながら降りたことが、とても楽しい思い出として心に残っています。

今回の交流事業では、多くの人たちの優しさや思いやりに触れながら、さまざまな貴重な経験をすることができました。台湾での生活や文化、食べ物、歴史に

関する思い出は、実際に現地を訪れ、自分の目で見て体験しなければ分からなかったことばかりでした。その一つ一つが心に残り、今回の交流事業に参加できて本当によかったと、改めて感じています。また、この交流を通して学んだことや感じたことを大切に、これからの学校生活や将来に活かしていきたいと思います。今回の経験は、私にとって忘れることのできない大切な思い出となりました。

私が本国際交流事業に参加した動機は、以前から国際交流に強い関心があり、実際に海外の人々と交流することで視野を広げたいと考えていたからです。また、海外に友達を作り、異なる文化や価値観を直接知りたいという思いもあり、本事業への参加を希望しました。教科書やインターネットを通して知る外国の文化だけでなく、実際に現地の人々と関わることでしか得られない経験をしてみたいと考えていました。

本事業では、高雄市私立中山工商職業学校の応日クラスの生徒の方々と交流する機会をいただきました。交流では、互いの住んでいる地域の魅力や学校生活、趣味などについて話し合いました。台湾の高校を実際に訪問し、同世代の生徒の方々と直接交流する機会はこれまでほとんどなかったため、すべてが新鮮で、とても貴重な体験となりました。授業の雰囲気や学校の設備、日本の高校との共通点や違いを知ることができ、多くの学びがありました。

交流の中では、日本語を一生懸命使って話しかけてくれる生徒さんの姿がとても印象に残っています。自分の言葉が相手に伝わったときの喜びや、言葉が通じなくても笑顔でコミュニケーションを取ろうとする姿勢に、国際交流の楽しさと大切さを実感しました。

交流後には、高雄市私立中山工商職業学校の生徒さんのご家庭にホームステイをさせていただきました。海外でのホームステイは初めての経験であり、言葉の壁は想像以上に大きく、最初は不安を感じる場面も多くありました。しかし、ボディランゲージや翻訳機を活用しながら、少しずつ自分の気持ちを伝えることができるようになりました。完璧な言葉でなくても、「伝えたい」という気持ちがあれば相手は理解しようとしてくれるということ、身をもって感じました。

ホームステイ中には、高雄市内を案内していただき、観光地や地元の人々が集まる場所、夜市など、さまざまな場所を訪れました。また、台湾に今も残っている日本の建物や、日本と台湾の歴史的なつながりについて教えていただく機会もあり、両国が昔から深い関係を築いてきたことを実感しました。日本で生活しているだけでは気づくことのできない視点から歴史を学ぶことができ、とても印象に残っています。

さらに、この事業を通して、私だけでなく、一緒に参加した県内の高校性10人(私を除いて9人)とも親しくなることができました。普段の学校生活では関わる機会の少ない仲間たちですが、この事業がなければ決して出会うことのなかった貴重な縁です。共に学び、悩み、笑い合った時間は、とても心強く、かけがえのない思い出となりました。本当に出会えてよかったと感じています。また同

年代の参加者の英語力や国際交流に対する取り組みから良い刺激を受け、今後の自身の活動においても積極的に取り組む意欲が高まりました。

ホストファミリーの方々も、終始温かく迎えてくださり、多くの場所や台湾の文化、食事、生活習慣を丁寧に教えてくださいました。慣れない環境の中でも安心して過ごすことができたのは、ホストファミリーの皆さんの優しさのおかげだと感じています。言葉が十分に通じなくても、心のこもったおもてなしや気遣いはしっかりと伝わり、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今回の国際交流事業を通して、文化や言語が異なっても、相手を理解しようとする気持ちや、伝えようとする姿勢があれば、心は通じ合うということを学びました。また、自分から一歩踏み出して行動することの大切さや、異文化を受け入れる柔軟な考え方の重要性にも気づくことができました。

今後は、この経験で実際に感じたことや学んだことを、自分の通う高校の友人や家族に積極的に伝えていきたいと考えています。また、インバウンドの影響により、地元である沢山でも観光客と関わる機会が増えています。今回実感した文化の違いやコミュニケーションの工夫を生かし、外国の方々とも積極的に関わっていきたいです。

本事業は、私にとって非常に貴重で忘れられない経験となりました。国際交流の楽しさと難しさの両方を知ることができ、本当に参加してよかったと心から感じています。この経験を今後の生活や将来に活かしていきたいです。

今回の台湾派遣事業を一言で表すなら、「出会い」だと思う。知らなかった台湾の歴史や文化、様々なバックグラウンドを持つ人々、体験したことのない食事、このほかにも様々な「出会い」があった。そんな未知との遭遇はどれも私の心を突き動かした。

私が特に印象に残っているのは中山工商高校との交流だ。あんなにも盛大に出迎えてくれるとは思っておらず、歓迎会の会場に足を踏み入れた時はとてもドキドキした。その後の各教室でのレクリエーションで私は1年生の外語クラスにお邪魔した。教室に足を踏み入れるやいなや、たくさんの生徒が話しかけてくれた。

「スキンケアは何を使っているの?」「日本のコスメ持っているよ!」本当にたわいもないことであったが、こうした会話が徐々に私の緊張をほどいてくれた。どこの国でも日本でいうJKの会話は織りなされていて、異国の地でまるでふるさとかのような温かさを感じた。実際に台湾に派遣される前の事前研修で、台湾での英語浸透率は日本と同程度であると教わった。しかし、私が思うに、台湾のほうが日本よりも英語が定着しているように感じる。私は中国語があいさつ程度しか話せないで、会話が行き詰まってしまったときは私が英語で考えを伝え、英語が話せる生徒がそれを中国語にして伝え直してくれた。そうしているうちに、とてもインターナショナルな空間が完成した。さらに、私がお世話になったクラスには日本語が話せる生徒もいたため、英語でも中国語でも考えが伝わらなかった時にはその生徒が翻訳してくれた。3か国語が飛び交うめまぐるしい世界の中に、台湾の高校生のパワフルな創造力や発信力を感じ、日本との違いを痛感させられた。台湾の高校生は皆とても優しく、笑顔が絶えない。とても明るく朗らかな雰囲気の中で生活しているという印象を受けた。学校のテストや一日の生活の流れは日本とあまり大差はないようで、お互いに勉強が大変であると笑い合った。そんな皆との別れは非常に名残惜しく、いただいたプレゼントを今も大切に自分の部屋に飾っている。

「一期一会」。この言葉の重みが心にしみたと同時に、この経験を日本でのステップアップに生かさなければいけないと強く思う。

改めて、中山工商高校、並びに外語一甲の先生、生徒に感謝を伝えたい。

次に衝撃を受けたのは街の風景である。日本では見たことがないようなバイクの交通量に驚き、ユーモアあふれる信号機のデザインに感動し、建物の連続性や夜市の展開にワクワクが止まらなかった。山梨県の朝は鳥のさえずりがパリッとした空気の中に響き、夜はシーンとした静寂が広がる。一方で台湾は朝にも鮮魚や新鮮な果実が並ぶ

市場が開かれ、夜も人々が大勢集う屋台が出店する。一日中、人々、町全体が明るい国であるという印象を受けた。また、私と同世代の台湾の学生はとても大人っ

ぼく、年上のように感じた。ルールの中で生きることが強調される日本に対し、台湾では自由の代わりに自己の行動に責任を持つという考えが、意図せず浸透しているのだと思った。そのことが、人々の気さくさや社会の良好な治安に結び付いているのではないだろうか。

ホームステイ先の高校生と交わした会話の中で印象に残っているものがある。彼女は日本のことを「food is nice, people are good, culture is great...」と言ってくれた。その時、私も台湾に対し全く同じことを感じた。このような直接の交流を通し、人とのつながり、また、異文化がともに生きることへの尊さを実感した。

今回の派遣事業での「出会い」を通し、世界中の人々とつながりたいという願いがさらに強くなった。異なる言語が交わろうとするとき、そこには翻訳機という無機質な媒体が必要である。私自身、今回の事業では翻訳機なしに円滑な交流は図れなかった。しかし、翻訳機が示す訳語は温かみがなく人と人とのつながりを実感できない。滞在中、直接思いが伝えられればいいのにと何度思ったことだろうか。

そんな後悔を晴らすべく、帰国後、中国語の勉強を始めた。もし、また台湾で出会った人々にもう一度会える機会があったら、その時は私の心からの感謝を中国語で伝えたい。そんな機会があると信じている。

また一つ、大好きな場所が増えた。出会ってくれたすべてに感謝したい。

ありがとう。謝謝

3泊4日の台湾での交流事業を通して私はたくさんの事を学び、たくさんの気づきを得ました。

まず、高雄の中山商業高級学校に訪問した際に気付いたことがあります。

1つは大半の生徒が制服ではなくジャージを着ていたことです。

このことについて詳しく聞きませんでしたでしたが、学校の校則についてホストファミリーに聞きました。以前は髪型やメイク等の校則があったそうですが、生徒が自由に授業を受けてほしい等といった理由から校則がなくなったそうです。ジャージに関してもこのような背景があったので、高速と同時期に規則が変わったと思いました。また、日本の校則について聞かれた際、学校ごとに差はあるもののその厳しさに驚いていました。自分自身、多少厳しいと思うところはあるかもしれませんがこんなにも差があるとは思いませんでした。

2つ目は学校の大きさです。

中山商業高級学校だけではなく、他の学校も近くを通ったりしてその大きさを体感しました。中山商業高級学校は生徒が8000人ほどいるそうです。また学校には5個ほど棟があり、学科も生徒が把握しきれないくらい膨大な数があるそうです。これは私の考察にはなりませんが、台湾での観光であまり学校を見かけなかったこと（気づかなかっただけかもしれませんが…）と台湾自体の人口が膨大な数ではないことから、台湾または高雄の学区自体が日本よりも広いと考えました。

次に台湾だけではなく、外国の事についてです。

1つは政府が変わったから自分の国ではなく、台湾などの別の国に行って勉強している人がいることです。高校のクラスの交流時にキャンパスツアーをしてくれた子や、ホストファミリーの子は台湾の方ではなく、フィリピンの方とインドネシアの方でした。2人に台湾に来た理由を聞いたのですが、2人とも数年前に国の政府が変わって以前よりも様々な状況が悪くなったから台湾に来たと言っていました。日本は主要な政府組織が自由民主党で約40年間変わっていません。そういう背景があってか日本人は政府が変わったから別の国に行ったり、留学したりする人はなかなかいません。最近、与党が自由民主党と公明党から自由民主党と日本維新の会に変わりました。しかし、私の周りには与党が変わったから海外に行ったという人は誰もいません。若者でも自分の国の政治や政府についての知識を持っていて、自分のために自分で考えるという行為ができていて驚きました。日本の若者は政治に興味を持っていないといわれていますが、今回の事もありその通りだと感じました。これから、ニュースなどを見て政治や時事についての知識を増やしていきたいです。

もう1つは、日本を好きな方が多いということです。

私は今回の事業前にも2回海外に行ったことがあります。その時にも海外での日本の人気度が高いと感じました。最終日の朝に市場に行った際、「Where are you from?」と聞かれ日本と答えた際に「Oh! I love Japan!」と言ってくれました。台湾の街並みにもくら寿司やスシローといった日本のチェーン店が多かったり、サンリオやしまじろうなどの日本のキャラクターを多く見かけたりしました。世界的に日本という国は人気ですが、台湾は特に日本愛が強いと感じました。このように日本を愛してくれている台湾を、世界に好かれている自分の国、日本に誇りをもってこれからの未来を大切にしていきたいです。

最後に、日本内でのことについても気づいたことがあります。それは日本の注意喚起です。日本の公共のトイレでは「トイレットペーパーを流してください」や、「トイレットペーパーはごみ箱に捨てないでください」等の外国人観光客向けの注意喚起をよく見かけます。台湾に行くまではこんな当たり前のことを何で注意喚起をしているのか疑問でした。台湾ではトイレットペーパーは流さずにごみ箱に捨てるという日本で過ごしていたら考えられない習慣がありました。トイレでの注意喚起は台湾のような習慣が当たり前となっている国の方々に向けたものだと感じました。また、気づいたことによってこのような注意喚起がある日本のおもてなしの精神は細部にまで気を使っている素晴らしいものだ改めて感じました。

台湾は親日国として有名ですが、この事実があまり日本で広まっていないと思います。その大きな理由としては、台湾を国として認めてしまうことで日本と貿易をしている中国との関係が悪化する可能性があるため、ニュース等で広めづらいということがあると考えています。そんな中でも、SNSでは台湾は過去に日本に東日本大震災時での募金をはじめとする数々の事をしてくれているというコンテンツが多くあります。そんな台湾に日本から何か募金のような恩返しをしているといったことはあまりないと感じます。これから、台湾の方々がピンチの時に日本が支えてあげられるようなことが増えていけることを願います。私は今回で多くの事に気づき、多くの事を学びました。今回であった方々や経験が台湾交流事業で得た宝物です。今回の経験は私の将来につながる、貴重な機会でした。今回の経験は私にとって大きな財産です。本当にありがとうございました。